

聖書：創世 42：1～38

説教題：弟のことで罰を

日時：2024年6月9日（朝拝）

今日の章でヨセフとヨセフの兄たちが再会します。兄たちはもう一生互いに顔を合わせることはないだろうと思っていたに違いありませんが、前回見た通り、ヨセフは奴隷からエジプトの宰相の立場にまで引き上げられました。飢饉は全世界に及び、あらゆる国の人々が食料を求めてエジプトのヨセフのところへ来ました。その中に何とヨセフの兄たちも混じっていたというのが今日の章の内容です。

そのエジプトへやって来た兄たちのグループに弟のベニヤミンは含まれていませんでした。ベニヤミンはヨセフの他に、ヤコブの愛する妻ラケルから生まれたただ一人の子です。そのため、ヨセフがいない今、彼に災いが降りかかるといけないと思い、ヤコブはベニヤミンを行かせませんでした。この時もまだラケルから出た子を特別扱いしていたヤコブであることが分かります。そのベニヤミンを除く 10 人の兄弟がヨセフのところへ来ました。この 10 人こそヤコブをエジプトへ売り飛ばした人たちです。

彼らはヨセフの前に来て、顔を地につけて伏し拝みました。ヨセフはその瞬間、兄たちだ！と分かりましたが、兄たちはまだ分かりません。ヨセフが兄たちによって売り飛ばされたのは 17 歳の時でしたが、この時はすでに 37 歳にはなっていました。最後に会った時から 20 年以上の月日が経過していました。そしてそれ以上にヨセフはエジプトの高官として立派な身なりをしていたでしょう。まさかエジプトの国政を司るこの宰相がヨセフであるとは兄たちは思ってもみないことです。果たしてこれはどういう再会となったのでしょうか。この後、まずヨセフの立場から考え、その後で兄たちの立場から考えるという仕方でこの箇所を読んで行きたいと思います。

まずはヨセフの立場からです。彼について私たちの目に留まることは彼が兄たちに対して見知らぬ者のように振る舞い、荒々しい言葉で話したことです。なぜ彼はそうしたのでしょうか。先に触れた通り、ヨセフは 20 年以上も兄たちに会っていません。今目の前にいるのは、20 年以上前に自分を奴隷として売り飛ばした兄たちです。その彼らにいきなり「私はヨセフです」と自らを明かす関係にはありません。もしそうし

たら兄たちは自分たちに有利に事が運ぶようにいくらでも演技をするでしょう。それでは兄たちが今どういう状況にあるのか正しく知ることはできません。そこでヨセフは自分を明かす前に、兄たちは今どういう状態にあるのか知ろうとします。

まず7節で「おまえたちはどこから来たのか」と問います。すると彼らは「カナンの地から食糧を買いに参りました」と答えました。確かに彼らは兄たちです。ヨセフは次に「おまえたちは回し者だ。この国の隙をうかがいに来たのだろう」と言います。随分なことを言ったものだとも思いますが、これもさらなる情報を得るための方策だったと考えられます。このやり取りを通して（13節から）彼らは12人兄弟で、一人の人の子であること、そして末の弟は今、父と一緒にカナンに残っているという情報を得ます。これによってヨセフは父ヤコブは健在であること、また末の弟ベニヤミンも無事であることを知ります。兄たちは13節最後で「もう一人はいなくなりました」と言いましたが、ヨセフはどんな思いで聞いたのでしょうか。いなくなったなどと他人事のように言っていますが、それは兄たちが売り飛ばしたからではないか！そしていないどころか今ここにいるだろう！あなたたちの前に！とヨセフは思ったことでしょう。

まだこれだけでは良く分かりません。ヨセフは次に末の弟をここに連れて来い、それによっておまえたちの誠実さを試す、それまでおまえたちを監禁する、と言います。ヨセフがこのように要求したのは弟ベニヤミンを見たいという思いもあったのかもしれないませんが、それ以上にこの家のことをもっと詳しく知ろうとしたからでしょう。兄たちはあの20年前から変わったのか、それとも変わっていないのか。かつて自分を売り飛ばした時のことをどう思っているのか。またヨセフを憎んだように同じ母の子ベニヤミンに対してどうなのか。

ヨセフのこのような態度は、20年前の仕返しをしているかのように見るべきではないと思います。彼の荒々しい態度は、見知らぬ者であるように振る舞おうとするための少し不自然な演技でもあったのでしょうか。もし怒りに満たされてかつての復讐をしようと思うなら直ちに彼らを厳しく罰することもできます。しかし表面的な厳しさとは裏腹にヨセフの心は彼らへの憐れみと配慮に満ちていたことが色々と示されています。

まず9節でヨセフは兄たちがひれ伏したのを見て、かつて彼らについて見た夢を思い出しました。以前はいい気になって自慢げに話したヨセフです。しかしこれまでの訓練を経て、「解き明かしは神のなさることではありませんか」と述べて、神にのみ栄光を帰す者となりました。その彼は兄たちが伏し拝む姿を見て、神が示された通りであったことを思い出し、主への恐れを覚えつつ、主の御心にかなう仕方で行動しなければ！と導かれたに違いありません。

そのことは18節によりはっきり示されています。彼はここで最初の計画を変更します。最初は16節にある通り、一人を送って弟を連れて来い、それまでは残り9人を監禁すると言っていました。しかし18節以降では一人を残し、9人を帰らせることとしました。なぜでしょうか。ヨセフは18節で「私も神を恐れる者だから」と言います。彼は三日間神の前で考えて、こうする方が良いと結論したのでしょう。この方が多くの食料をカナンに持ち帰ることができますし、またこの方が彼らの負担が少なくなることは明らかです。主が自分にしてくださったように、より憐れみ深い方向へ、恵み深く接する方向へと変わっているヨセフです。

また兄たちとやり取りする中、陰で泣いたことが記されています。それは21～22節の兄たちの会話を聞いたからでした。後で兄たちの視点からも見ますが、兄たちはここでかつてヨセフにしたことを思い返して、自分たちを責めています。また22節には長男ルベンがあの時、ヨセフを助け出そうとしたことが語られます。兄たちは通訳を挟んでいたため、まさかヨセフがこれを聞いて理解しているとは知りませんでした。しかしヨセフは思わず感情を抑えることができず、兄たちから離れて泣きました。これは彼の心の傷の最も深い部分に関わる話です。今や兄たちは、あのかつてのことを振り返り、その心が責められています。それを知って心が激しく揺さぶられるヨセフです。これはかつてのことを思い出して自己憐憫に浸る涙ではなく、兄たちが今や自分たちのしたことを反省していることを知るところから来る涙でしょう。それは赦す心の用意を持っている人の涙と言えます。

またヨセフは帰る9人の袋に穀物を満たし、それぞれの銀を袋に戻し、さらに道中の食料を与えました。これも兄たちに対するひそかな愛と配慮のなせるわざでしょう。どのように和解に至るべきか、その道を探り、ふさわしい時が来るまで明白な態度は留保しつつも、心では赦す用意を持ち、寛大に接する彼の姿を私たちは見るのです。

さて兄たちの立場から見ると、この再会はどのようなものだったのでしょうか。彼らはエジプトの大臣の前にひれ伏したところ、突然スパイの嫌疑がかけられました。彼らは自分たちの潔白を証明するため、問われるまま家族のことを色々話します。その結果、彼らは監禁されてしまいます。三日後に、残るのは一人だけで良いと言われて、まだましな状態にはなりました。この時、彼らはどんな反応を示したでしょう。彼らは互いにこう言いました。21 節：「まったく、われわれは弟のことで罰を受けているのだ。あれが、あわれみを求めたとき、その心の苦しみを見ながら、聞き入れなかった。それで、われわれはこんな苦しみにあっているのだ。」これは一見不思議なことです。今エジプトの大臣が自分たちにこのようにしていることと、自分たちがかつてヨセフにしたこととは、直接的には関係がないはずですが、あれはあれ、これはこれと切り離して、今はこの大臣がすることを非難したとしてもおかしくありません。ところが彼らはこの苦しみを通して、神がこうして私たちのかつての罪を取り上げて、私たちをさばいておられるのだ！と感じたのです。彼らがこのように述べたということは、おそらくこれまでも彼らの心のどこかにはヨセフを売ったことによる良心の咎めがあったのでしょうか。ただしそれについて兄弟たちと話し合うようなことはなかったと思われます。ところが今回、自分たちがこのような目にあうことによって、神は私たちがヨセフにしたことを見ておられて、私たちに同じようなことをしておられるのだと思ったのです。ガラテヤ人への手紙 6 章 7 節：「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります。」

私たちも同じようなことをしばしば経験すると思います。何か悪いことが起こった時、直接的な原因は思い当たらなくとも、神はこれによって私の過去のあの罪、この罪を罰しておられると感じる。以前の放置したままの罪が急に思い起こされて問われるということがあるのではないのでしょうか。もちろん私に起こる苦しみは、必ず私が過去に犯した何らかの罪への報いであるというわけではありません。ですから他人の苦しみを、その人に何か隠れた罪があるかのように見てはならないと聖書の色々な箇所で言われています。しかし他人ではなく、自分の場合、ある苦しみを通して未解決の過去の罪を思い起こさせられるということはあります。このヨセフの兄たちのケースがそれです。これは未解決の過去の罪がもたらす報いであり、また刈り取りです。神がそのように働いておられるのです。

この後もそうです。帰る道中、一人が袋を開けるとそこに銀がありました。彼らはそれを見て動揺しました。それは盗みを働いたと告発され、大変なことが起こるのではないかと恐れたからでしょう。彼らは身を震わせ、互いにこう言いました。「神は私たちにいったい何をなさったのだろう。」 彼らは神がこうして私たちのかつての罪を問題にしておられるのだと感じたのです。

彼らはカナンの地にいる父ヤコブのもとに帰って報告します。特にシメオンが戻って来ていない経過を説明します。そうしてから自分たちの袋を開けてビックリ。それぞれの袋の中に銀がありました。これを見て彼らも父も恐れます。一人の袋から銀が見つかっただけでも恐ろしいのに、みんなの袋から銀が出て来ました。これでは全員が盗みを働いたとの嫌疑がかけられ、大変な罰が下されるのではないかと。父ヤコブはどう思ったのでしょうか。なぜこれらの銀がここにあるのか。息子たちはまさかエジプトでシメオンを売って来たのではないかと。ヨセフもそうだったのではないかと。

ヤコブは9人の息子たちを責めます。お前たちはすでに私に子を失わせた。ヨセフはいないし、シメオンもいなくなった。さらにベニヤミンも連れて行くと言う。これに対してルベンが一つの提案をしますが、それは受け入れられません。ヤコブはこの子は一緒に行かせないと断言します。この子の兄は死んで、この子だけが残っているのだからとヤコブは言います。そしてもしこの子が死ぬようなことがあれば、「おまえたちは、この白髪頭の私を、悲しみながらよみに下らせることになるのだ」と言います。このヤコブの言葉をもって、重苦しいムードの中、42章は閉じることとなります。

さてこのように暗いムードで終わっているからと言って、ここに良いことは何もなかったかと言えば、そうではないということも思います。今日の章はこの後の章につながって行きます。むしろ今日の章はこの後の章の展開になくはならないプロセス、どうしても必要なプロセスと言えます。それはヨセフの兄たちが苦しみの中で自分たちの罪を自覚し、自らを責めたことです。それは罪の刈り取りであると同時に良い兆候と言えます。彼らは自分たちが犯した罪を問題にし、それを深く考え、神の前で悔い改め始めています。それは確かにまだ不徹底です。しかしここから新しいことが始まって行くのです。いやすでに始まっていると言えます。私たちはここであのヨセフの兄たちがこうして自らを反省している言葉を読む時、将来の和解に向けて何かが動

き始めていることを感じるのではないのでしょうか。そしてそのように読む時、確かにこの章の上にも神の奇しい摂理の御手が豊かに働いていたことを認めるようにされるのではないのでしょうか。

私たちもこの世にあり、罪ある者たちとして、色々な関係が壊れているという現実にあると思います。そこで神の摂理を信じて、どのように取り組むべきでしょうか。まずヨセフから学ぶことは、たとえひどいことをされた側であっても仕返ししないことです。色々な思い、複雑な感情はあるかもしれません。しかし神を恐れる者として行動するヨセフの姿から学びたいと思います。具体的にどのようなステップを踏むべきか、主に導かれて取るべきプロセスは様々かもしれません。しかしヨセフの行動は愛に裏打ちされていました。喜んで赦そうとする姿勢で関わっていました。私たちも神が上にいて導いてくださっていることを覚えて、その神が喜ばれる仕方で、神の愛と憐れみを反映する仕方で人々に接し、神の良き道具となることを祈り求め、その振る舞いを導かれて行きたいと思います。

また私たちは自分が兄たちと同じ側にいることを思うかもしれません。神の前で自分に反省すべき点、悔い改めるべき点があることを思われるかもしれません。そう思うなら、その悔い改めの道を行くことこそ恵みの道を進むことです。自分の罪を自覚することは神の働きの証拠です。ヨハネの福音書 16 章 8 節に「罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかに」するのは聖霊であると言われていいます。その聖霊の働きを感謝し、聖霊の導きに従いたいと思います。もしその聖霊の働きをはねつけ、罪をそのまま放置するなら、それは最後のさばきの時に取り上げられることとなります。へブル人への手紙 9 章 27 節に「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」とあります。そうなる前に、救いが提供されている今の内に、それを認めて神の恵みにあずかる方がはるかに良いのです。その悔い改めのあるところに、この後見るように、神の赦しを体験する道があり、また人間関係の回復と癒しを与えられる道があります。そのように今日も導いてくださっている神を見上げて、御前で私たちのなすべき歩みへと進み、ヨセフと兄たちの関係からも良いものを取り出される同じ摂理の神の導きによって、神が備えたもう祝福に生かされる者たちとされて行きたいと願います。